自著を語る

このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

心の七つの見方

岡　隆

本書は心理学を学ぶ大学生や大学院生のために書かれた「心の哲学」の入門書です。最初に，物理的世界とは異なるものとしての心というデカルト的な二元論を紹介しながら，その見方の問題を明らかにしていく中で，ここ一世紀の心理学の歴史の中で次々と現れてきた六つの非二元論的な見方を紹介していきます。それらは，話し方としての心，行動としての心，頭の中のソフトウェアとしての心，脳としての心，科学的構成概念としての心，社会的構成概念としての心です。これら七つの見方は，それぞれが問題を抱えていますが，それぞれが正しい主張も行っており，他にはない利点を持っています。ウォラック夫妻は，これらの利点を統合して，八つ目の見方を提案しようとしています。

この翻訳を通して，私自身は，これまで無頓着，無自覚だった自分の心の見方を反省し相対化してみるという良い機会に恵まれました。また，本書では触れられていない非西欧的な心の見方などをさらに学んでいく良い足掛かりを得ることができました。

訳　　岡隆
発行　新曜社
四六判／ 248頁
定価　本体2,600円＋税
発行年月　2016年11月

おか　たかし
日本大学文理学部心理学科教授。専門は社会心理学。著書はほかに『社会的認知研究のパースペクティブ』（編著，培風館），『心理学研究法5　社会』（編著，誠信書房），『心理学研究法』（共編著，有斐閣），『社会心理学小辞典』（共編著，有斐閣），『21世紀の学問方法論』（分担執筆，冨山房インターナショナル），『社会言語科学6　方法』（分担執筆，ひつじ書房）など。

PTGの可能性と課題

宅　香菜子

編集の過程で何度も読んだが，読むたびもっと知りたくなる。

先日，第7章を読んだときには，心理臨床の場面で「介入を行う支援者と介入を受ける対象者」という関係性よりは，対等なパートナーシップのもとでかかわるほうが，何らかの学びや気づきが促進されやすいのではないか，というところが心に残った。受け手と送り手，利用者と提供者。役割をあえて忘れる瞬間を意図的に作りだすか。執筆者ともっと話がしたくなる。

今，第10章のコラムを読んでいる。「こうやったらいい」と押し付けるのではなく，人や地域が持っている力に敬意を払い，小さな変化をサポートすることが成長につながるのではという提案だ。その小さな変化が起きた時，これが後に続く一歩になるという信頼があったのかな。ずっとこのまま変わらない可能性もあると思ったかな。

本書には，危機を経験した人のその後を語る27名の声が載せられている。「回復」と言えば回復なんだろうけれど，でもそれとは何か違うようなものを言葉を尽くして語っている。

出会ってほしい人ばかりだ。

編著　宅香菜子
発行　金子書房
A5判／ 232頁
定価　本体3,200円＋税
発行年月　2016年11月

たく　かなこ
アメリカミシガン州，オークランド大学心理学部アソシエイトプロフェッサー。専門は臨床心理学。著書はほかに『悲しみから人が成長するとき：PTG（Posttraumatic Growth）』（風間書房），『外傷後成長に関する研究：ストレス体験をきっかけとした青年の変容』（風間書房）など。